

**目からうろこの「自立」と「依存」の関係のお話**

みなさんは「自立」と「依存」とは全く反対の意味であると思いませんか？その考え方に真っ向から異を唱える方を紹介します。その方は熊谷晋一郎（くまがやしんいちろう）さんと言います。簡単にプロフィールを紹介します。1977年、山口県生まれ。小児科医。新生児仮死の後遺症で脳性まひに、以後車いす生活となる。小中高と普通学校で統合教育を経験。大学在学中は全国障害学生支援センターのスタッフとして、他の障害者とともに高等教育支援活動をおこなう。東京大学医学部卒業後、病院勤務等を経て、現在は東京大学先端科学技術研究センター教授。その熊谷教授が以前受けたインタビュー記事から一部引用します。

脳性まひとはどういう障害ですか？

出生時に呼吸が止まるなどのアクシデントが起きて、その後遺症で運動機能や姿勢を維持する脳機能に障害が生じた状態のことです。基本的に、症状がそれ以上進行することはありません。

一人暮らしを始めたいきさつは？

小学生の頃、ふと、「親が先に死んでしまったら、自分は生きていられない」と気づきました。当時の私は、生活全般、食事をするのも学校に行くのも、何でも親の介助を受けていましたから。この不安は年齢を重ねるにしたがって大きくなっていきました。親なしで暮らせる“実験”を早めにしておかないとまずいと思っていました。

[中略]

一人暮らしを始めて、まず困ったのはトイレでした。最初はなにも手を加えていないトイレで、介助してくれる人もいなくて、失禁してしまいました。でも、こう体を動かしたらうまくいくんじゃないかとか、ここに手すりを付けたら使えるんじゃないかとか、試行錯誤していくのは楽しい実験でした。私も物に合わせて動きを変えるし、物も私に合わせて[原文ママ]形を変える。どちらかが一方的に譲歩するんじゃないかと、物と私が「互いに歩み寄る」。一人暮らしの体験は、生まれて初めて世界と直接交渉することができた、そんなわくわくする感じがしました。それまでは世界と私の間には、いつも親が挟まっていて、「向こう側がよく見えない、じれったい！」みたいな感じでしたからね。

「自立」とはどういうことでしょうか？

一般的に「自立」の反対語は「依存」だと勘違いされていますが、人間は物であったり人であったり、さまざま

なものに依存しないと生きていけないんですよ。

東日本大震災のとき、私は職場である5階の研究室から逃げ遅れてしまいました。なぜかという単純で、エレベーターが止まってしまったからです。そのとき、逃げるということを可能にする“依存先”が、自分には少なかったことを知りました。エレベーターが止まっても、他の人は階段やはしごで逃げられます。5階から逃げるという行為に対して三つも依存先があります。ところが私にはエレベーターしかなかった。

これが障害の本質だと思うんです。つまり、“障害者”というのは、「依存先が限られてしまっている人たち」のこと。健常者は何にも頼らずに自立していて、障害者はいろいろなものに頼らないと生きていけない人だと勘違いされている。けれども真実は逆で、健常者はさまざまなものに依存できていて、障害者は限られたものにしか依存できていない。依存先を増やして、一つひとつへの依存度を浅くすると、何にも依存してないかのように錯覚できます。“健常者である”というのはまさにそういうことなのです。世の中のほとんどのものが健常者向けにデザインされていて、その便利さに依存していることを忘れてるわけです。

実は膨大なものに依存しているのに、「私は何にも依存していない」と感じられる状態こそが、“自立”といわれる状態なのだろうと思います。だから、自立を目指すなら、むしろ依存先を増やさないといけない。障害者の多くは親か施設しか頼るものがなく、依存先が集中している状態です。だから、障害者の自立生活運動は「依存先を親や施設以外に広げる運動」だと言い換えることができると思います。今にして思えば、私の一人暮らし体験は、親からの自立ではなくて、親以外に依存先を開拓するためでした。

TOKYO 人権 第56号 (2012年11月27日発行)

インタビュー／鎌田 晋明 (東京都人権啓発センター)

編集／脇田 真也

高校総体もほぼ終わり、3年生は自身の進路実現に向け本格的に動き出します。3年生に限らず熊谷先生が仰るように、進路上の悩みだけでなく、あらゆる悩み事や心配事を一人で抱え込むこと無く、勇気を持って周りの多くの人々に「依存しながら高校生活を過ごしてみても如何でしょうか。考え方や見方を変えるだけで、今より少し楽に過ごすことが出来るようになりますよ。

受験生の4パターン

受験生のタイプについて、2つの軸から考察してみたいと思います。

受験生を「勉強の有無(する・しない)」と「受験の結果(合格・不合格)」という2軸で掛け合わせると、次の4つのパターンに分類されます。

	合格する人	不合格になる人
勉強する人	パターンA	パターンC
勉強しない人	パターンB	パターンD



それぞれ詳しく見ていくと、次のようになります。

パターンA: 一生懸命勉強し、合格する人

パターンB: 勉強をせずに、合格する人

パターンC: 一生懸命勉強したものの、不合格だった人

パターンD: 勉強をせず、不合格だった人

皆さんはどの人間になりたい、あるいはなりたくないと考えますか。

一見すると「楽をして結果が出る B が良い」と思われがちですが、私はこのタイプが最も危険だと考えます。本来、成果とは努力の先にあるべきものです。頑張るべき時期に努力を怠り、それでも結果がついてきてしまうと、その成功体験が仇となり、以降の人生で努力をしなくなる可能性が高くなります。人生にはこころ一番という勝負所が必ず訪れます。その時に努力できない人間になってしまえば、望む未来を掴めません。だからこそ、必要な時に泥臭く努力できる人間になっておく必要があるのです。

同様に、「努力したのに報われない C にはなりたくない」と避ける声もあるでしょう。しかし、C は決して悲劇ではありません。全力を尽くしても結果が出ない現実というものには存在します。しかし、全力で挑んだからこそ「何が足りなかったのか」という本質的な反省ができ、そこから深い学びが生まれます。その時味わった悔しさや、自分の弱点と向き合った経験は、人間としての深みとなり、他人の痛みに寄り添える強さへと変わったりもします。これらの学びと経験を手にした C の人こそが、次の挑戦で最も A の領域へとステップアップできる可能性を秘めていると、私は確信しています。

受験は人生における大きな転換期であり、重要なイベントの一つです。しかし、その受験を通して本当に得るべきものは、単なる「合否」という結果ではないはずです。目標に向かって計画を立て、誘惑に負けずに机に向かったその『プロセス』こそが、何よりの財産です。結果の如何にかかわらず、目標に向かって一生懸命に努力を尽くした人は、多くの気づきや学びを得ています。そして過酷な受験を乗り越えたとき、一回りも二回りも大きな人間へと成長を遂げているのではないのでしょうか。結果を恐れて全力を出さないのはもったいない。将来の自分のために、まずは今日できる努力から、全力で積み重ねていきましょう。